

2017年10月上旬刊行予定の新注解シリーズ「NTJ 新約聖書注解 ガラテヤ書簡」より抜粋した見本冊子です。本シリーズの特長を実感していただけます。

日本語で書き下ろす 聖書注解シリーズ NTJ 新約聖書注解 ガラテヤ書簡 見本冊子

浅野淳博◎著

※【1. 翻訳】には、《逐語訳》と《自然訳》という2つの日本語訳があります。本注解書シリーズ（NTJ）の監修者会は、日本語訳の背後に原語のギリシャ語が透けて見えるような翻訳を目指すことを、執筆方針の1つとして挙げています。《逐語訳》がこの翻訳に相当します。一方で《自然訳》は、《逐語訳》をもとにして、執筆者による解釈の意図をより自然な日本語によって反映させた翻訳です。後者はあくまでも『ガラテヤ書注解』の執筆者の判断による補足なので、2つの日本語訳を挙げることはシリーズに一貫した特徴ではありません（浅野）。

2. アンティオキア事件（2:11-14）

【翻訳】

《逐語訳》

2:11 しかしケファがアンティオキアに来たとき、私は面と向かって彼に対立した。彼が咎められるべきだったからだ。¹²それは、誰かヤコブからの者たちが来る前に、彼は異邦人と一緒に食べていたが、彼らが来ると、割礼からの者たちを恐れて退き始め、自らを分離し始めたからだ。¹³そして残りのユダヤ人も彼と一緒に虚偽を行った。

《自然訳》

^{2:11}ところがアンティオキアをケファが訪ねた折に、私は真っ向から彼と対立しました。彼に非難されるべきところがあったからです。¹²というのも、ヤコブからの派遣団が来るまで、ペトロはここで異邦人のキリスト者らと一緒に食卓を囲んでいたのですが、派遣団が到着するとユダヤ人一般の目を恐れてしり込みし、異邦人から距離を置き始めたからです。¹³すると残りのユダヤ人のキリスト者らも彼と一緒にな

それゆえバルナバまでも彼らの虚偽によって引き離された。¹⁴しかし彼らが福音の真理に対して真っ直ぐ歩んでいないのを見たとき、私は皆の前でケファに言った。「もしあなたが——ユダヤ人なのに——異邦人のように(生き)、ユダヤ人のようではなく生きるなら、いかにあなたは異邦人にユダヤ人のように生きることを強いるか。」

って偽善を行い、結果的にバルナバさえも彼らの偽善によって真理から引き離されてしまいました。¹⁴しかし彼らが福音の真理にのっとり、真摯に振る舞っていない様子を見たとき、私は教会全体を前にしてケファに言いました。「ユダヤ人のあなたが異邦人のように振る舞って、ユダヤ人らしく生きていないなら、どうしてあなたは異邦人に対してユダヤ人のように生きることを強要するのか」と。

【形態／構造／背景】

食は文化だ。本来「キリストの体」という意味で用いられていた soul food という句 (Wilson 1612:310) は、米国で 1960 年代にアフリカ系市民の伝統料理を指す表現として広まった (OED)。日本では近年、その郷土料理というニュアンスが外来語として定着し、たとえばゴーヤチャンプルーは「うちなんちゅ (沖縄の地元民)」のソウルフードとして認識されるようになった。食は文化であり、そこに民族意識 (あるいは地域性) が表象される。民族アイデンティティ理論の言語を用いるなら、会食 (commensality) は言語や土地や宗教などとともに民族意識を表象する顕現要素だ (Barth 1969:9-38)。食へのこだわりはユダヤ民族に限ったことでないが、ユダヤ教において顕著だった。ユダヤ民族意識の顕現要素としての食事は、割礼や安息日とともに不可侵性が高い (トピック #5.A)。したがって前ペリコペのエルサレム会議では割礼に焦点が置かれたが、本ペリコペで場面がアンティオキアに移ると、食事にまつわる問題が組上に乗る。

アンティオキア事件は冒頭のカラ 2:11 で事件の概要が知らされ、カラ 2:12-13 にその詳細が続く。そしてカラ 2:14 におけるパウロのペトロ批判では、「ユダヤ人のように振る舞う」／「異邦人のように振る舞う」という句によって、問題の本質に民族意識が深く関わっていることを教える。民族性を強調するこれらの表現はそれでも具体性に欠けるが、このペトロ批判の内容がカラ 2:12 でのペトロの行動を意識していることが分かります。

(v.12a = v.14b, v.12b = v.14c)、読者はガラ 2:12 が 2:14 をさらに理解する鍵となることに気づかされる。本ペリコペのアウトラインは以下のとおりである。

- a. ペトロの虚偽とその影響 (2:11–13)
 - i. パウロとペトロの対峙 (2:11)
 - ii. ペトロの虚偽 (2:12)
 - α. 異邦人との食事 (2:12a)
 - β. 異邦人への拒絶 (2:12b)
 - iii. ユダヤ人キリスト者の虚偽 (2:13a)
 - iv. バルナバの虚偽 (2:13b)
- b. ペトロ批判の理由 (2:14)
 - i. おおやけのペトロ批判 (2:14a)
 - ii. 異邦人のような振る舞い (2:14b)
 - iii. ユダヤ人のような振る舞い (2:14c)

【注解】

2:11 しかしケファがアンティオキアに来たとき、私は面と向かって彼に対立した。彼が咎められるべきだったからだ。

「しかし (δέ)」という弱い逆接の接続詞は、歴史的叙述の舞台が移行したことを知らせる。「ケファがアンティオキアに来たとき」、いわゆる「アンティオキア事件」が動き出す。ここでは前出の副詞「そのあと (ἐπειτα)」(ガラ 1:18, 21; 2:1) が繰り返されず、むしろ時間的順序が不明瞭な「とき (ότε)」が用いられることから、von Zahn (1907:110–11) や Lüdemann (1980:104–05) は、アンティオキア事件がガラ 2:1–10 に描かれたエルサレム会議に先行すると考える。しかし、「しかし」という逆接接続詞のもっとも自然な理解は、〈エルサレム会議の合意にもかかわらず、しかしその後アンティオキアで事件が起こった〉である。本注解書はガラ 2:1–10 を使 15 章のエルサレム会議と同視した。使 15 章では、エルサレム会議後にアンティオキアでパウロとバルナバとが衝突するので (15:36–40)、これが本ペリコペでのパウロのバルナバ批判と符合すると考えられる。もっとも使 15 章では、マルコを宣教旅行に同伴するかという

問題でパウロとバルナバとのあいだに対立が生じている。教会の正当性を訴える目的で執筆されたであろう使徒行伝が、アンティオキア事件を教会のあり方に関わる対立として描くよりも、2人の個人的問題として描くことを選んだとしても不思議でない。また、2人の対立の原因が1つだったとも限らない。

エルサレムから直線にして500キロほど北上すると、地中海に注ぐオロンテス川に接する「アンティオキア (Αντιόχεια)」に至る。前300年頃、シリア王朝のセレウコス1世が建設したこの地は、その父か息子(両者ともアンティオコス)に因んでアンティオキアと命名された。「アンティオキア」と呼ばれる都市は、パウロがいわゆる第一次宣教旅行の際に訪れたピシディア地方のアンティオキアをも含めると16あるが、シリアのアンティオキアは「オロンテス河岸のアンティオキア」と称された。当初ここは土着のシリア人以外にマケドニア人、アテナイ人、ユダヤ人が入植して都市を建設したとされる(『古誌』12:119)。前64年に将軍ポンペイウスがこの地域をローマ属州シリアとして支配下に置くとアンティオキアはその州都となり、後1世紀には50万人の人口を擁するローマ帝国三大都市(ローマとアレクサンドリアに次ぐ)の1つとなる。ユダヤ人の人口は35,000人とも65,000人とも言われる(Hengel & Schwemer 1998:291-92; Longenecker 1990:68)。ヨセフスによると、ディアスポラ・ユダヤ人はローマ帝国中に散在したが、とくにアンティオキアに集中していた。この市で異邦人と同様の権利が与えられていたユダヤ人共同体は、その経済力によってエルサレム神殿を支えた。また異邦人の内にはユダヤ教に関心を抱く者も少なからずいたようだ(『戦記』7:43-45)。ユダヤ人への優遇と平穏なくらはカリグラ帝治世(後37-41年)に著しく乱されたが、その後パウロの時代と重なるクラウディウス帝治世(後41-54年)には彼らに対する偏見や抑圧はやや沈静化した。それでもユダヤ人と非ユダヤ人との緊張関係は続いており、このことがアンティオキア教会における好意的異邦人(トピック#5.C)の扱いにも影響を与えていたと考えられる(Murphy-O'Connor 1996:147)。エルサレムをはじめとするユダヤ地方の教会ほどでないにせよ、アンティオキア教会のユダヤ人キリスト者のあいだでも、ユダヤ民族アイデンティティが軽んじられるような仕方では好意的異邦人が教会に編入されることに対する慎重論があっただろう。使徒行伝によると、

エルサレムでの迫害を逃れて北上したユダヤ人キリスト者がこの地で初めて「キリスト者 (Χριστιανός)」と呼ばれた (使 11:26)。

そもそもペトロはなぜこのアンティオキアを訪問したか。エルサレムでの迫害を避けるため (Longenecker 1990:71) か。それならなぜペトロだけが避難したか。少なくともヤコブはエルサレムに留まっていたようだ (ガラ 2:12)。ユダヤ人への使徒であるペトロが、宣教活動の延長 (あるいは一環) でアンティオキアまで足を伸ばし、同僚のパウロやバルナバを訪問したとも考えられよう。エルサレム会議のあと、ペトロがアンティオキア教会における宣教活動を視察したいと考えても不思議でない。

アンティオキアを訪問したペトロに対し、パウロは「**面と向かって彼に対立した**」。「対立した (ἀντέστην = ἀντίστημι)」という複合動詞 (ἀντί + ἵστημι) は、基本的に「対立する、敵対する、反抗する」を意味する。たとえば、ヤンネとヤンブレがモーセに**反抗した**ように不敬虔な者が**真理に逆らう** (Ⅱテモ 3:8)。またヤコブ書の読者は「**神に服従して、悪魔に抵抗する**」(ヤコ 4:7) よう教えられる。この強い反発のニュアンスはさらに「面と向かって (κατὰ πρόσωπον)」という句によって強調され、その対立の直接性が印象づけられる (LXX 申 7:24; 9:2; 11:25; 土 2:14; 代下 13:7-8 参照)。エルサレム会議での「**交わりの右手**」(2:9) と対照的だ。

対立の理由は、ペトロが「**咎められるべきだったからだ**」。「咎められる(べき) (κατεγνωσμένος = καταγινώσκω)」という語は、しばしば神の裁きや責めを念頭に置いている (Ⅰヨハ 3:20-21; シラ 19:5; 『戦記』 1:635; 7:154, 327. BDAG 409; *TDNT* VIII:568)。するとパウロは、この表現を用いながら既述の反対者への呪い (ガラ 1:8-9) を意識しただろうか²⁹。アンティオ

29 このパウロのペトロ批判は、『偽クレメンス』(後3世紀)が描くペトロとシモン・マグスとの対峙 (使 8:17-24 参照) のモチーフとなり、シモン・マグスへの批判がそのままパウロの教会へのユダヤ人キリスト者による批判として解釈されてきた (Baur 1863:53, n1; Elliott 1993:431)。Schneemelcher 編の新約聖書外典翻訳で『偽クレメンス』を担当する Georg Strecker もこの視点に立って自らの翻訳を解説している (Schneemelcher 1992:II:535-41)。ペトロはシモン・マグスの背後に想定されているパウロに対し、「お前が私を**咎められるべき**とするなら、お前は私にキリストを啓示した神を非難している」(『偽クレ』「説教」19:6) と訴える。しかし近年この解釈は論破されつつある (Bockmuehl 2012:54-57)。それは、『偽クレメンス』がパウロに直接言及しないこと、改宗前のパウロ (サウロ) は言及されるが、サウロの批判の矛先はペトロでなくヤコブに向けられ、サウロ自身もシモン・マグスを批判する

キアでのペトロの行動は、律法を遵守するよう異邦人キリスト者に強いることになるとパウロに映った（ガラ 2:14）。パウロにとってこの行動は、ガラテヤ教会における反対者らの活動と重なる。彼のペトロに対する批判は、ガラ 2:13 で 2 回繰り返される「虚偽」という語と 2:14 で用いられる「福音の真理」との対比によって、さらに印象的に描かれる。

2:12 ^aそれは、誰かヤコブからの者たちが来る前に、彼は異邦人と一緒に食べていたが、^b彼らが来ると、割礼からの者たちを恐れて退き始め、自らを分離し始めたからだ。

理由を示す前置詞「それは (γάρ)」は、ペトロの咎められるべき理由を導く。アンテオキア事件の発端は、ヤコブの派遣団の到着にある。「誰かヤコブからの者たち (τινὰς ἀπὸ Ἰακώβου)」は誰か。Lightfoot (1887:112) は「ヤコブ」が「エルサレム教会」を指す換喩 (metonymy) で、必ずしもヤコブを直接意味しないと考える。しかし換喩は固有名詞を曖昧な地名や集団名で表す婉曲表現で、その逆でない (Bullinger 1968:567-87)。したがってオバマ (元) 大統領の発言が換喩では〈ホワイトハウスの声明〉となる。一方で Hort (1904:80-81) はこの集団をヤコブの派遣団と考えるものの、派遣団がヤコブの意図を誤解してアンテオキア教会にもたらしたと考える。Lightfoot も Hort もエルサレムの指導者であるヤコブを擁護し、彼をアンテオキア事件の要因にしない。これは恣意的な解釈だろう。むしろパウロがヤコブの名を明示するのは、ペトロの非難すべき行動の背後にヤコブの意向があると考えたからだろう。すなわちパウロは、エルサレム会議の合意にかかわらず、(ヤコブに代表される) エルサレムの使徒らがアンテオキア教会に混乱をもたらしたと非難している。

ヤコブの派遣団が来訪する前、ペトロは「異邦人と一緒に食べていた (μετὰ τῶν ἐθνῶν συνήσθαι)」。ペトロはどのように異邦人と食事をしたか。パウロは彼の宣教活動において、1つのパンと1つの杯をユダヤ人と異邦人とが分かち合うという主の聖餐を実施したようだ (I コリ 11:23-26)。このような民族的境界線を完全に排除した会食 (聖餐型会食) がアンティ

(『偽クレ』「再会」1:70) からだ。また、シモン・マグスの立場はパウロの思想というよりグノーシス思想を反映している。これによって、原始教会をペトロ的教会とパウロ的教会との対立として描く歴史観 (Baur 1863 参照) を支持することは困難だ。

オキア教会ですでに可能だったか。使徒行伝では、ペトロが異邦人のコルネリウスを訪ねた際、ユダヤ人が外国人と関わることも訪問することも律法に反すると前置きする（使 10:28）。このように厳格な律法解釈も、ユダヤ社会にはじつに存在した。とくに食事に関して、トセフタ（300年頃の編纂か）がユダヤ人と異邦人との会食の可能性を完全に否定している。「もし非ユダヤ人が自分の息子の婚礼の祝宴のために町のすべてのユダヤ人を招くために使いを送ったなら、彼ら（ユダヤ人）が彼ら自身の食事と飲み物運び込み、彼ら自身の給仕に仕えさせても、彼らは偶像を崇拜する（すなわち、異邦人の汚れを受ける）」（『T ザラ』 4:6）。一方でミシュナ（200年頃の編纂か）にはより柔軟な見解もある。「もしイスラエル人が異邦人と同時に食事をするとき、ぶどう酒の容器を1つ食卓に置き、もう1つの容器を給仕用の小卓に置いて、席を外すなら（イスラエル人が短時間席を立てて目を離すことがあれば）食卓の上にあるものは禁じられているが、小卓の上にあるものは許されている」（『M ザラ』 5:5）。前者が異民族間の食事を完全否定するのに対し、後者は異民族間の食事を前提とした上で、偶像崇拜につながりかねない食卓のぶどう酒は避けるべきだが、小卓のぶどう酒は飲んで良いと教えている。これは、ユダヤ人が（たとえばトイレか何かで）短時間席を立った間に異邦人がぶどう酒をお神酒として神々へ献げる危険性への対処とも考えられる（Tomson 1990:230-36）。またユディトは異邦人ホロフェルネスの陣営に入る際に、独自のぶどう酒、食事、食器を持ち込む（ユディ 10:5）。すなわち、ユダヤ人が食事と食器を自分で用意する限りにおいては、異邦人との食事が可能な場合がある（並列型会食）。もっとも聖餐型会食に類する食事は、例外的ではあろうが第二神殿期ユダヤ教文献にも見られる。ヨセフはエジプト人ペンテフレスの娘アセナトとの婚姻を前にしてペンテフレスの家に入り、「彼らは食べて飲んで祝った」（『アセ』 20:5）。『アセ』 7:1 はヨセフがエジプト人と一緒に食事をしないと述べているが、『アセ』 20 章でヨセフは異邦人の食卓についている（トピック #5.B.2）。すなわち当時のユダヤ人社会においては、異邦人との食事に関する理解にある程度の幅があり、会食を拒絶する厳格な立場がある一方で、例外的に異邦人の食卓について異邦人と食事をする場合もあった。それでも基本的には、偶像崇拜を回避する何らかの方策がとられたようだ（Sanders 1990:179）。

それでは、アンティオキア教会ではどうか。使徒行伝が報告するようにアンティオキア教会がパウロによって設立された異邦人教会でなく、迫害を避けてエルサレムから移住したユダヤ人キリスト者によって設立され、パウロがその教会の一同労者として後に加えられたとすれば（使11:19-26; 13:1）、パウロの異邦人宣教を象徴するような民族を超えて1つのパンと1つの杯を分け合う聖餐型会食が、パウロ独自の宣教が開始される以前のアンティオキアですでに実施されていたとは考え難い。おそらく上述の並列型会食——同じ場所で異なる食事と食器を用いたか、ユダヤ人が用意した食事を異なる食器を用いて食べたか——だったろう。ペトロはアンティオキア教会を訪問して、この会食に加わった。

ペトロは「彼ら」すなわちヤコブの派遣団が来ると、「割礼からの者たちを恐れ」た。「割礼からの者たち (τοὺς ἐκ περιτομῆς)」とは誰か。これを前ペリコペに登場した「偽兄弟」と同視する研究者もいるが (Lightfoot 1887:112)、なぜパウロは「偽兄弟」と明言しないか、またなぜペトロが「偽兄弟」を恐れねばならないかが不明だ。あるいは「割礼からの者たち」がヤコブの派遣団と同視される場合もあるが (原口2004:102)、それなら代名詞を用い「彼ら (αὐτοὺς) を恐れ」で事足りるだろう。むしろ「割礼 (περιτομή)」がおうおうにしてユダヤ人一般を指す語として用いられる点に注目すべきだ (ロマ4:12; コロ4:11. 使10:45; 11:2参照)。したがってこの表現は「ユダヤ民族に属する者ら」であり、すなわちユダヤ人一般がペトロの恐れの対象だったと考えるべきだろう (Schmithals 1963:54)。それではヤコブの派遣団の来訪によって、なぜペトロはユダヤ人一般を恐れたか。ヤコブの派遣団はペトロに何を伝えたか。おそらく派遣団の来訪とペトロの恐れ背景には、クラウディウス帝治世下 (後41-54年) におけるユダヤ人一般のあいだでの反ローマ的民族感情の醸成があっただろう (Murphy-O'Connor 1996:139-41, 151)。その一環としてユダヤ民族根源主義者による民族的肅正、すなわち異邦人がもたらす不浄を排除する抵抗活動が散見された (Jewett 1971a:204-06)。そのような状況で、ユダヤ地方の諸教会が安易に異邦人と交流することは、このような暴力活動の対象となる危険性を高めた。アンティオキア教会がエルサレム教会の影響下にあると認識したヤコブは (トピック#17.C)、アンティオキア教会のユダヤ人が異邦人との交流に細心の注意を払うようにとの指示を

送った (Schmithals 1963:55-57; Bockmuehl 2000:72-73; Murphy-O'Connor 1996:151)。この注意喚起に応答したペトロは、民族感情の高まるユダヤ人一般の目を恐れ、異邦人信徒との並列型会食さえも不適切と判断し始めた。

そして事件は起こる。ペトロは「退き始め、自らを分離し始めた (ὕπεστελλεν καὶ ἀφώριζεν ἑαυτόν)」。ここで用いられる退去と分離を表す2つの動詞 (ὕπεστελλεν, ἀφώριζεν) はいずれも未完了時制で、ペトロが徐々に態度を変えた様子を表す。アンティオキア教会の慣例にしたがって、異邦人と同じ場所で並列型の会食をしていたペトロは、派遣団がもたらしたヤコブの懸念に応じて、徐々にこの食事から身を引いた。たとえば、食事の席に同席しても食べないところから始まり、次第に会食の場に同席しなくなった。ペトロの空席には、冷めた食事だけが残った。

2:13 そして残りのユダヤ人も彼と一緒に虚偽を行った。それゆえバルナバまでも彼らの虚偽によって引き離された。

ペトロの反応に影響された「残りのユダヤ人ら (οἱ λοιποὶ Ἰουδαῖοι)」が、アンティオキア教会のユダヤ人キリスト者であることは文脈から明らかだ。ペトロが異邦人との並列型会食さえも不適切と判断したことに応答し、他のユダヤ人キリスト者も「一緒に虚偽を行った (συνυπεκρίθησαν)」。 「一緒に (σύν)」と「虚偽を行う (ὑποκρίνομαι)」からなるこの複合動詞は新約聖書で他に使用例がない。「虚偽を行う」の名詞形 (ὑποκρίσις) は本来演劇における「演技」あるいは弁論における「語り」や「手振り」を意味したが (「偽善者」と訳される同語根の名詞 ὑποκριτής は「役者」を意味する)、否定的には「口実、虚偽、偽善」を意味する。たとえば殉教者エレアザルは、処刑を回避するために豚肉を食べたかのように偽って欺くことをよしとしなかった (II マカ 6:25)。新約聖書においては、マタイ福音書がファリサイ派を批判する際に、「あなた方は外からは義人と見えるが、内からは虚偽と不法に満ちている」(マタ 23:28) と述べる。アンティオキア教会のユダヤ人キリスト者が「一緒に虚偽を行う」とは、ペトロに倣って異邦人との会食を避けたことを指す。

この影響はバルナバにまで及んだ。「(バルナバ) までも (καί)」という強調の小辞が、パウロにとっての想定外の事態を表現している。前ペ

リコペでは、パウロが1人称単数の「私」を用いて異邦人宣教の責任を一身に負っている様子も伺えるが（ガラ2:2, 3, 6, 7, 8）、それでもパウロはバルナバと共にエルサレムを訪問し（ガラ2:1）、エルサレムの使徒らは「私とバルナバ」に交わりの右手を差し出した（ガラ2:9）。バルナバはパウロの宣教における同労者にして最大の理解者だった。そのバルナバまでもがペトロとユダヤ人キリスト者の「虚偽」によって「引き離された（συναπήχθη）」¹⁴。この複合動詞（ともに[σύν] + 離れて[ἀπό] + 導く[ἄγω]）は、肯定的には「順応させる」ことを意味する。したがってパウロは、「身分の低い人々と関わりなさい」と教える（ロマ12:16）。一方でこの語は「引き離す」ことを意味するので、IIペト3:17は不法者の誤りによって自らの確信から引き離されないように注意する。バルナバの場合には、「彼らの虚偽」によってパウロとの共有理解、すなわち「福音の真理」（ガラ2:14）から離れるように導かれた（したがって「真理から引き離されてしまいました」）。この受動態表現が不可避的な圧力を前提にしているなら、バルナバの責任は軽減されていようか。むしろこの事態を誘引したペトロの責任の重大さを強調していよう。

使徒行伝によると、エルサレム会議後のアンテオキアにおいて、パウロとバルナバはマルコを宣教旅行に同伴すべきかという問題で袂を分かつ結果となった（使15:36-41）。しかし本ペリコペによると、彼らの訣別の背後にはより根本的な異邦人宣教に関する意見の食い違いがある（異なる意見としては、荒井2014:326）。そしてこの問題はパウロとバルナバの関係性のみならず、パウロとアンテオキア教会の関係性に影を落としただろう（Murphy-O'Connor 1996:158）。一般に第一次宣教旅行として知られる小アジア東部の宣教活動がアンテオキア教会の権威のもとでパウロとバルナバをとおしてなされたとすれば、いわゆる第二次、第三次宣教旅行は、アンテオキア教会の権威から距離をおいたパウロ独自の裁量によるエーゲ海沿岸での宣教活動と見なすことができよう。おそらくその際、パウロは宣教の拠点をアンテオキアからエフェソへと移した。

2:14 ^a しかし彼らが福音の真理に対して真っ直ぐ歩んでいないのを見たとき、私は皆の前でケファに言った。^b もしあなたが——ユダヤ人なのに——異邦人のように（生き）、ユダヤ人のようでなく生きるなら、^c いか

「あなたに異邦人にユダヤ人のように生きることを強いるか。」

パウロは上述のペトロらの虚偽行動に対する批判を直接話法で報告する。その導入部 (2:14a) では、ガラ 2:5 で用いた「福音の真理」という表現が繰り返される。ガラ 2:5 でパウロは、異邦人テトスに割礼を強要する「偽兄弟」の圧力と対比して「福音の真理」に言及した。トピック #4 で言及したとおり、割礼と食事規定とはともにユダヤ民族アイデンティティの表象だ。したがってパウロにとって、食事規定という民族アイデンティティの表象を基準として異邦人キリスト者を同化 (／排除) することは、諸国民に神の永遠の契約の祝福が及ぶという福音の真理から逸脱する。ここで「(福音の真理) に対して」と訳した前置詞 *πρός* は、より一般には方向性を示す「～に向かって」を意味する (したがって岩波訳は「真理に向か^って」)。しかしここでの真理はパウロが報告したエルサレム会議の合意を意識しているだろうから、その合意との関係性を指す前置詞 (「～に対して／のっとり)」との理解がより適切だろう (BDAG 875, 3e 参照)。「真^っ直^ぐ歩^んで (*ὀρθοποδοῦσιν* = *ὀρθοποδέω*)」は非常に稀な動詞で、教会教父の用法もおおたガラ 2:14 から影響を受けている。同根の形容詞 (*ὀρθόπους*) は「直立した」を意味する。したがってこの動詞には、「直線的に歩く」とか「正しく生きる」というニュアンスがあろう (LSJ 1249)。本節では、前ペリコペのエルサレム会議での合意 (福音の真理) と整合性のある振る舞いが問題となっている (したがって「真摯に振る舞^って」)。ペトロやアンテリオキア教会のユダヤ人キリスト者——バルナバをも含め——は、その合意から逸脱しているとパウロは判断した。

彼はこの判断にしたがって、「皆の前でケファに言った (*εἶπον τῷ Κηφᾷ ἔμπροσθεν πάντων*)」。この「皆 (*πάντων*)」にはこれを限定する語がない。したがってこれは、異邦人との食事を控えたユダヤ人キリスト者のみならず、アンテリオキア教会の全キリスト者を指そう (したがって「教会全体を前にして」)。パウロはのちにガラ 6:1 で、罪人を回復させるための柔^れ和^な忠告の必要に言及するが (マタ 18:15-17 参照)、本節では厳^しいおお^やけの糾弾がある。これは大きな影響力を持つ公人への厳格な批判とも考え得るが、ペトロが異邦人から徐々に距離をとるようになったことに鑑みると (ガラ 2:12 参照)、おおやけの厳しい批判の前に個人的で柔和な忠告があったかも知れない。

この糾弾は条件法によって表現されているが、その条件節では「異邦人のように (ἐθνικῶς)」と「ユダヤ人のように (Ἰουδαϊκῶς)」という2つの副詞が、動詞の「生きる／振る舞う (ζῆναι)」を対照的に修飾している。これらの副詞は新約聖書で他に使用例のない語で、ともに民族性を表現する。アレクサンドリアのクレメンスはこれら2つの副詞を対比して用い、以下のように言う。「彼は唯一の神を、ギリシヤ人に対しては外国人に適したように (ἐθνικῶς)、ユダヤ人に対してはユダヤ人に適したように (Ἰουδαϊκῶς)、そして私たちに対しては靈に適したように新たに示した」(『ストロマテイス』6:5:41; 『戦記』6:17; 『ギリシヤ哲学者列伝』7:56:6 参照)。すなわち「あなた (σύ)」であるペトロは「ユダヤ人なのに」、異邦人に特徴的で、異邦人に期待され、異邦人に適した振る舞いをしており、ユダヤ人に特徴的で、ユダヤ人に期待され、ユダヤ人に適した振る舞いをしていない。これは具体的にどのような行動を指すか。

【形態／構造／背景】で触れたように、本ペリコペでは構造的にガラ2:12a と 14b、12b と 14c が対応している。すなわちパウロは、ペトロの行動をガラ2:12で報告し、ガラ2:14でその行動の虚偽性をそのままペトロへ突きつけている。したがって本箇所¹の直接話法前半(14b)は、ヤコブの派遣団の到着以前にペトロが異邦人と食事をともにしていたこと(12a)を指す。上述のとおり、もしアンティオキア教会で並列型会食が行われていたとすれば、少なくとも厳格なユダヤ人の視点に立つと、この食事は律法に反しており(『Tザラ』4:6)、すなわちこれは、ユダヤ人のようではなく異邦人のように振る舞うことだ。パウロは意図的に厳格な律法解釈を持ちだし、2:14bにおけるペトロの行動と2:14cにおけるペトロの行動とのあいだにある大きな矛盾を強調する。

パウロによるペトロへの糾弾は、本節の条件法の帰結節においてクライマックスを迎える。「ユダヤ人のように生きる」(『イグ・マグ』10:3 参照)と訳した *iouδαΐζειν* (= *iouδαΐζω*) は、また「ユダヤ人になる」(エス・ギ8:17; 『戦記』2:454)をも意味する。上述したようにガラ2:12b と 2:14c とが対応するなら、これは異邦人との会食を中止したことを指す。もしヤコブの派遣団が、安易に異邦人と交流しないようにと注意したなら、そしてその結果としてペトロをはじめとするユダヤ人キリスト者が異邦人との会食を中止したなら、それは異邦人キリスト者にとって、ユダヤ人キ

リスト者との会食に相応しくなるよう圧力をかける（強いる [ἀναγκάζεις]）ことと同様だ。「ユダヤ人のように生きる」ことが具体的に割礼を受けることを意味するのではないが、ペトロの行為は結果的に少なくとも一部の異邦人キリスト者に対して割礼の実施を促す圧力となっただろう（Dunn 1993:129–30; Esler 1998:137）。じつにエス・ギ 8:17 では、多くの異邦人がユダヤ人への恐れから「割礼を受けてユダヤ人になった（περιετέμοντο καὶ ἰουδαίῳ）」とある。したがって、テトスへの割礼の「強要」（2:3）と異邦人キリスト者への「強要」（2:14）に同じ ἀναγκάζω という動詞が用いられているのは意図的だろう。このペトロ批判の神学的意義は次のペリコペで述べられるが、それは「福音の真理とその適用」を論ずるガラテヤ書の中核部の導入として機能している。

【解説／考察】

「共同体、アイデンティティ、安定性」

（ハックスリー 2013.『すばらしい新世界』）

アルダス・ハックスリーはディストピア小説の傑作と評される『すばらしい新世界』（*The Brave New World*）の冒頭で、そこに描かれたユートピアの憲章を上記の3語で表現した。もっとも「安定性」は圧倒的統治、「アイデンティティ」は強制的同化を意味する。これらによって実現する「共同体」には不可侵的な社会階層がそびえる。この辛辣なユートピア批判は、おおよそ100年を経てもなお、あるいはなおさら——ある意味でジョージ・オーウェル著『一九八四年』とともに預言の成就として——現代の読者を惹きつけて止まない。

この批判精神とリンクするポスト・コロニアル的感性によって、かつて Boyarin (1994:233) はパウロによるある種の普遍主義的な言説に関し、民族的差異を無視した同化の圧力——つまりユダヤ人がその民族性を放棄させられる圧力——と批判した。この視点と感性自体は私たちが注意深い読者として育むべき素養でもある。しかしその批判は、ユダヤ教の一宗派だった教会において少数の異邦人が異邦人——ガラテヤ人、フリギア人、ピシディア人、リカオニア人等——として神との信頼関係を持つ可能性を

パウロが切り開こうとしていた、という重要な事情を看過していないか(浅野 2012a:212-19. 緒論 E.3 参照)。ユダヤ人の民族感情が支配的な環境において、ほんの少数の他民族出身者のアイデンティティを擁護することと、西洋社会がその圧倒的な力によってユダヤ人の尊厳を蹂躪するという、のちの教会が荷担した歴史とを混同してはならない。たとえば、戦場と化したペイルートの施設からイスラム教徒の痙性麻痺児童 36 人を救出したマザー・テレサの行動(1982.8.14)を、私たちはユダヤ人の尊厳を無視した帝国主義的暴力行為と結びつけるだろうか。マザー・テレサのパレスチナ人救出がユダヤ人迫害と直結しないように、パウロの異邦人擁護はユダヤ人の尊厳蹂躪に直結しない。

ただ私たちは——上のような混同を避けなければならないが——、弱小者を擁護するために割礼をはじめとするユダヤの特徴を相対化したパウロのレトリックが、反ユダヤ主義や民族差別を正当化するスローガンへとすりにすり替えられ用いられたという歴史を忘れてはならない(Stegemann 1996:293-94)。4 世紀のローマ教会による異教徒排斥運動(ユリアヌス『書簡』41B; 『ミソポゴン』364B)はその好例であり、それ以降これに準ずる過ちが繰り返されてきた。私たちは、生き残りのレトリックと、他者排除および暴力的同化のスローガンを明確に区別しなければならない。そして前者を後者へと移行させた責任を自ら引き受けることによって、繰り返されてきた負の歴史を断ち切る試みに参与することが望まれる。こうして私たちは、アイデンティティの多様性を祝いつつ、それが暴力のレトリックへと変容する力に抗する。そうでなければ、「自国第一主義」のスローガンの下で、被害者を装って他者を悪魔化し、他者理解の橋でなく他者排除の壁の建設を豪語する為政者がやすやすと輩出する世界に歯止めがかからない。

さらに現代の教会とキリスト者は、原始教会がその在り方を模索した様子から、いかなる福音伝道の姿が、多様性に富む人々に和解と理解と敬意を互いに育む場を提供し得るかを学び続けるべきだろう。それは、現代日本において多様化する教会のあり方を考察する起点ともなる。私の同僚が少年期に実際体験したケースだが、イスラム圏からのある留学生が近隣にモスクがない環境で暮らすなか、身寄りのない日本に順応しようとして、同じアブラハム宗教だという理由でキリスト教会に身を寄せたらしい。た

たとえば教会はこの異邦人に対してどのようにキリストの福音を体現するだろうか。

トピック #6 ΠΡΟΣΗΛΥΤΟΣ ユダヤ教の宣教？

A. 導入

使徒行伝は福音宣教の対象者を、ユダヤ人、ユダヤ人と血縁関係があるサマリア人、神を畏れる異邦人、そして一般の異邦人へと拡大させ、この救済論的また教会論的發展という枠組みに沿って宣教物語を最終地ローマへ向かって進める。この物語が3分の1以上進んだところで、ペトロはユダヤ地方での宣教活動の報告を兼ねてエルサレム教会へ帰還する。そこで彼が神を畏れる異邦人の救いに言及すると、エルサレム教会はまずこれに戸惑った。注意深い現代の読者は、この反応に対して驚きを禁じ得ないだろう。エルサレム教会にとって異邦人の救いはまったくの想定外だったのだ。彼らはペトロの詳細な改宗報告を吟味したあとで、はじめて「そうであれば、神は異邦人にさへも (καὶ τοῖς ἔθνεσιν)、命に至る悔い改めを与えたのだ」(使 11:18)と悟った。地の果てまでの福音宣教命令 (1:8) の史実性にかかわらず——史実ならばなおさら——、異邦人への無関心は興味深い。

なぜなら、宣教に熱心なキリスト教と比較してそうでないユダヤ教を劣等な宗教とする、反ユダヤ教的バイアスに立つ19世紀以前の議論 (McKnight 1990:2 参照) に別れを告げた聖書学は、一転して第二神殿期ユダヤ教が宣教に熱心だったとの結論にいたり (Jeremias 1958:11-19; シューラー 2017:221-57)、それゆえ原始教会による宣教への高い関心の要因を、系統的に先行するユダヤ教による宣教への関心に見出してきたからだ。〈第二神殿期ユダヤ教が積極的に「魂の獲得」に関わったので、この宗教母体から派生した教会はとうぜん宣教に熱心だ〉、という論理だった。しかしこの理解は、上に示した原始教会の異邦人に関する無関心を説明し得ない。そもそもユダヤ教は積極的に宣教をしたか。

【執筆者紹介】 浅野淳博（あさの・あつひろ）

1960年、山陰松江市生まれ。フラー神学校にてTh.M.、オックスフォード大学にてD.Phil.を取得。現在は、関西学院大学教授、西日本新約聖書学会会長。

単著：*Community-Identity Construction in Galatians* (London & NY: T&T Clark Continuum, 2005)；『ガラテヤ共同体のアイデンティティ形成』（創文社、2012年）。

共著：*The Cambridge Dictionary of Christianity* (Cambridge: CUP, 2010)；*The Oxford Handbook of Reception History of the Bible* (Oxford: OUP, 2011)；*T&T Clark Handbook to Social Identity in the New Testament* (London et al: Bloomsbury T&T Clark, 2014)；*The Trinity among the Nations* (Grand Rapids & Cambridge: Eerdmans, 2015)、『新約聖書解釈の手引き』（日本キリスト教団出版局、2016年）他。

翻訳：R.ボウカム『イエスとその目撃者たち』（新教出版社、2011年）、J.D.G.ダン『使徒パウロの神学』（教文館、2018年予定）他。

※本冊子は現在編集中の原稿であり、書籍化に際しては変更される場合があります。



NTJ新約聖書注解 ガラテヤ書簡

浅野淳博◎著

教会の破壊者だったパウロが、異邦人宣教の使徒となった。その背後にある歴史と思想とを小アジア諸教会に寄りそって語るガラテヤ書は、キリスト教神学の礎を築いた。伝統的な理解から最新の研究まで、豊かな研究成果に学びつつ本書簡を読み解く。納得と新しい気づきに満ちた、聖書読者必携の書。

A5判 上製・538頁・通常価格6,000円＋税
ISBN978-4-8184-0980-4 C1316

ご注文は全国のキリスト教書店、または下記日本キリスト教団出版局までお問い合わせください。

日本キリスト教団出版局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 TEL 03-3204-0422 FAX 03-3204-0457
■ ホームページ <http://bp-uccj.jp> ■ Eメール elgyou@bp.uccj.or.jp